様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２５年　５月３１日現在

機関番号：３２６４１
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2010～2012
課題番号：２２５２００９１
研究課題名（和文）同時代の知的文脈から見たアンリ・フォシヨンの総合的研究

研究課題名（英文）　Henri Focillon and the Scientific Background of his Time

研究代表者
阿部　成樹（ABE SHIGEKI）
中央大学・文学部・教授
研究者番号：９０２７０８００

研究成果の概要（和文）：
本研究では、フォシヨンの美術史学が、これまで言われてきたような単純な様式史ではなく、同時代の様々な学問的潮流に棹さすものであったことが具体的に検討された。とりわけ、アナール派を中心とする当時の新しい歴史学における時間論、社会学的視点、そして人類学的（民族学的視点）との共同歩調が明らかとなり、それが社会主義知識人としてのフォシヨンの立場とも調和するものであることが明確となった。

研究成果の概要（英文）：
I reconsidered the theory of Art History by Henri Focillon, which has been considered as a typically stylistic one focusing on the form of the work of art. Actually, Focillon's thought has been deeply influenced by severel trends in the Historical Science, in the Sociology and in the Anthropology. He shared the point of view with these disciplines, and that enabled him to think about the Art in wide range, from the West to Japan, and from the Middle Ages to his own days.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2010 年度	500,000	150,000	650,000
2011 年度	500,000	150,000	650,000
2012 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総　計	1,500,000	450,000	1,950,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：哲学・美学・美術史
キーワード：美術史、フォシヨン

１．研究開始当初の背景

２０世紀初頭のフランスの美術史家アンリ・フォシヨンの美術史学については、1980 年代後半から再検討の気運が高まっていた。1986 年、2007 年に刊行された論集、そして 2004 年に開催された大規模な展覧会とその充実したカタログは、その象徴である。まさにフォシヨン．ルネサンスといえる状況であるが、これらに共通する背景といえるのは、美術史学の従来のあり方が広範囲かつ根底的に見直されているという状況である。そうした中でフォシヨンの仕事の幅の広さ、その射程の長さの再認識が再認識され、注目を集めているといえるのである。本研究も、こうした動きに棹さすものとして構想された。

このような再認識の中で、様式史を駆使す

る中世美術史家という従来のフォシヨンのイメージは、様式史に取って代わり２０世紀の美術史研究において中心的流れとなったイコノロジーの凋落と軌を一にするように、更新されつつある。フォシヨンの仕事への再注目を促す最大の契機とは、現代における芸術概念の変容と、それに伴う美術史学にまつわる知の組み替えであろう。実際、聖遺物研究など従来「作品」と考えられてこなかった「モノ」が重要な研究対象となりつつある西欧中世美術史の分野も含めて、現在の美術史は「美術」という文化的カテゴリの拡大（もはや絵画・彫刻・建築という古典的な美術の定義は失効していると言っていいだろう）に合わせて研究対象を拡大し、その方法論は人類学を中心とする「モノとその形態の人文科学」に接近しつつある。西洋で一つの自立した学科として生まれ発展した美術史学は、いまや地域的には非西洋圏の、そしてジャンル的には従来の「美術」の枠組みを超えた人類の制作物全体を対象とするに至りつつあり、このことは従前の歴史実証主義的な方法論とは異なる方法を要請しているのである。

フォシヨンの仕事の見直しはこうした文脈の中で起こっているが、きわめて幅の広いフォシヨンの思索は、その源泉の探究と併せていまだ包括的な検討がなされているわけではなかった。つまり、新たなフォシヨン像はまだまだ説得力を持って描き出させるには至っていない。ここに、本研究を着想する根拠と余地があったのである。

２．研究の目的

上記の背景を念頭に、本研究ではフォシヨンの思索の特質をできるだけ包括的に取り上げ、それら相互の連関を探究することを目的とした。最終的には、フォシヨンの方法論、美術観のアクチュアリティを剔抉することが目的である。

知られている通り、知的存在としてのフォシヨンの活動は多岐にわたっている。リヨンとソルボンヌで美術史を講じるとともに、社会主義者として多くの政治的パンフレットを執筆し、民衆大学に関わり、演劇評をものし、最後には自由フランスに殉じる形でアメリカで生を終えた。その美術史研究もまた、名高い中世美術史のみならず、近世から２０世紀初頭の同時代美術までの西欧美術史、ルーマニアの民衆芸術から、極東の仏教芸術、北斎に至るまでが彼の関心を引いている。こうした知的存在の多面性を、できる限り歴史的に解明することが本研究の目的であった。

これまでフォシヨンについては、特にその政治的立場と美術史家としての基本的思考との関係が等閑視されて来たに等しく、他の人文科学諸分野との関連や思考の平行関係もまた、ごく断片的に、あるいは一般論的に扱われるのみであった。本論は、これらをより広く、かつ具体的に取り扱い、単なる傾向性の指摘から脱して説得力あるフォシヨン像を描こうとするものである。

それはまた同時に、美術についての彼の理論的立場をこれまで以上に明確にし、美術史領域の多様な仕事相互の関連性も全体的に把握することにつながるはずである。特に彼の美術観、美術理論は必ずしも体系だって述べられてはおらず、多くの暗喩を通して語られており、私の見るところ必ずしも十分適切に理解されているとはいいがたい。極端な向きは、これを一種の文学作品と称するほどである。しかし、フォシヨンのテクストを同時代の人文科学研究の文脈におき、それらとの理論的異動をつまびらかにし、用語や発想の共通性を明らかにすることによって、フォシヨンの考えを明確に理解することが可能になる。それも本研究の目的である。

またフォシヨンの思考の全体像を捉え返すことは、純粋に「美術」を問題にすることから脱し、実証主義歴史学の影響下から脱しつつある現在の美術史研究の明日を考えるにあたって重要な示唆をもたらすとも考えられる。

３．研究の方法

本研究においては、フォシヨンの思索を単に美術史学史の枠内で検討するのではなく、むしろ同時代の隣接諸学問との比較検討を試みた点に特色がある。主な比較の柱は、歴史学、民族学（人類学）、社会学（これら三分野も相互に深く関連づけられている）、そしてシュルレアリスムなどの同時代の美術の動向にまつわる言説である。ただし他にも、他の多くの分野に方法論的な影響を与えた言語学（比較言語学）、生物学（特に進化論）、そして社会主義者のテクストなども重要な比較対象として視野に入っている。

この時代、人文諸科学の分野においては様々な領域の関心が絡み合い、互いの方法論を摂取し合って複雑な関係性を有していた。この点は、既に欧米、日本の思想史的研究が明らかにしているところである。

この際、研究方法には大別して二つある。ひとつは、個々の学者たち（あるいは、出版者などその周辺にいる者たち）の個人的関係性を伝記的に追求すること。今ひとつは、あくまで言説のレベルで相互の関係性を探ることである。

本研究では、後者の方法をとることとした。伝記的方法をとる場合、書簡などフォシヨンが残したアルシーヴを検討する必要があるが、現段階ではそれが難しいと見られることが理由の一つである。同時に、言説を通したマクロな視点による検討の方が、人間関係の細部に入り込む伝記的研究に比べてより明

確なフォシヨン像を描き出すことを可能にすると判断したためでもある。

ただしその際、必ずしもいわゆる概念史的研究方法は取らなかった。例えばほぼ同時代のフロイトなどについて、学問領域の境界を超えた概念史的研究はすでにいくつか行われており、成果をあげている。今回の研究でもそれを参照し、裨益するところも大であったが、本研究では特定の概念の共有あるいは継承だけに集中するのではなく、問題や発想、方法上の共通性や平行関係と言った、より広い意味での関係性をさぐることを方法上の課題としたのである。つまり、ある（いくつかの）概念を主たる対象として設定しその異動を追うのではなく、あくまで各種の著作を比較の単位として設定したのである。その理由は、それがフォシヨンの多大な知的消化吸収力を理解する上でより有効であるとともに、結果としてフォシヨンを取り巻いていたであろう知的パノラマを描き出すことを目指していたからでもある。いくつかの概念の連鎖というよりは、多様な流れがフォシヨンの思考の地平にどのよう流れ込んでいるのかを、できるだけ幅広く跡づけ指摘するために採られたのが、本研究の方法論である。

４．研究成果

まず歴史学は、何といっても美術史家たるフォシヨンにとって最も親しく最も重要な隣接領域と考えられる。その歴史学はフォシヨンの眼前で、後に「アナール派」として知られることになる新しい歴史学へと変容しつつあった。このことがフォシヨンにどのような刺激と示唆を与えたかを測定することがまず第一に必要なことである。今回の研究を通じて、歴史的時間論を中心に歴史方法論の深部におけるフォシヨンと同時代歴史学の共通性を具体的に明らかにすることができた。その時間論は線条性を排した複数性、そして一定の機械的な速度で流れるのではなく自在に速度を変え、時に逆行を許す時間論なのであるが、今回の研究を通じてその時間論が歴史学上の概念のみならず考古学（先史学）など他の分野にも見ることができ、フォシヨンも実際にそれらを参照して自らの時間論を豊かにしていることが確認された。同じ時間論は批評など同時代の他の多くの知的分野に広がりを持つばかりか、時間的変容をテーマとする現代の文学や写真といった表象文化にも認められるものであることが明らかとなった（このことは、優れて時間をテーマにした絵画群で知られるユベール・ロベールと現代の荒木経惟、港千尋の写真をつきあわせつつ論じた）。人が単一の時間ではなく速度が異なる複数の時間を生きていることの認識は、２０世紀以降の現代文化を通底する重要なものであることが示唆されたといえる。このことは、フォシヨンの思考の普遍性とアクチュアリティを証しするものである。さらに、こうした現代的な時間の痕跡を、可視的なモノの形態の変容に読み取る態度もまた、フォシヨン以降現代まで、引き続き持続していることも明らかとなった。

その歴史学は、対象の拡大と方法論の面で、社会学との重要な関連を持ち、またそのことが当時のホットな話題でもあった。新しい学問分野である社会学を生み出した胎動、すなわち個人を超えた次元にある社会という存在への関心は、作家によって構成される１９世紀美術史から無名の職人・建築家の世界である中世美術史へと転回したフォシヨンもまた、共有していた可能性がある。それゆえ、社会学的思考との関わりもまた視野に入れなければならない。この点は今後の課題である面を残しているが、研究誌『アナール』掲載の諸論考と、社会と芸術をめぐるフォシヨンの思考とが共有するものは明らかにすることができた。そもそもフォシヨンが社会と芸術との関連性についての論考をものしていることが注目される機会はこれまでなかったと言ってよいが、彼は実際には芸術の社会性について多大な関心を持っており、その中で紋章など従来の美術史の枠組みに収まりきらない対象にも関心を向けている。彼の考えは、社会を単なる背景と捉える次元のものではなく、むしろ表象文化のシンボリックな側面と関係づける面できわめて現代的である。この点は、今後もさらに探求し明確化していきたい。

同時にこの時代の歴史学、社会学は、人類学と多くを共有している。人類学もまた個人ではなく社会の次元を思考の領域としつつ、国家という既存の枠組みを自然に超える方法論を備えた代表的な学問であった。西欧を超えて東洋に目を向け、近代的な芸術概念に縛られない民衆芸術の領域に取り組んだフォシヨンにもまた、人類学的思考の反映を見ることができる。ここで注目されるのは、人類学がもたらしたヨーロッパの自己意識の変革に結びつけられる動きである。例えばバルトークの「民衆音楽」収集などに見られるように、従来の「民俗学」を超えた民衆文化研究がこの時代に多く見られるが、その背景をなす思考がフォシヨンの美術史研究にもまた存していることが感じられる。同じように、シュルレアリスムなど民族学的傾向を備えた同時代の芸術傾向やそれにまつわる言説との関わりについても諸種の文献を収集し、今後の更なる検討の深化の可能性を確固としたものとすることができた。

また今回の研究を通じて、社会主義知識人による思索との共通性をも発見するに至ったことが大きな収穫であったが、その様相の

消化と総括には今少しの時間をかけた検討が必要である。例えばシモーヌ・ヴェイユに見るように、当時労働組合運動に関わった社会主義知識人（サンディカリスト）たちは、彼らの時代の労働組合と中世の組合組織を結びつけることがあった。この点は、社会主義者にして中世美術史家であるフォシヨンを考えるにあたって看過できない事実であろうと思われる。考えてみれば、社会主義とは生（生活）の条件を真摯に考える立場のことであり、生 Vie というキーワードで美術と作品を語るフォシヨンの美術史の深い背景をなしているとしても不自然ではない。「手」あるいは手仕事（つまり労働）、メチエ（技法）への深い関心と評価（その反面としての機械技術、とりわけ写真への苛烈な批判）といったフォシヨンの思索もまた、単なる芸術論上の問題ではなく、彼の社会主義的ユマニスムとの関連の中で見なければならないと思われるが、それを具体的に論じる契機を今回見出すことができた。他に、熱烈な共和主義の信奉者であったデュルケム、その学派でやはり社会主義知識人として活躍し、歴史学と社会学の新たな関係性について積極的に論じたシミアンなど、フォシヨンの知的肖像と比較する価値のある存在の多くに目を開かれた。

さらに中世社会を社会的紐帯のありうべき姿と見て、それを背景とする芸術を評価する姿勢はウィリアム・モリス以来の伝統を持っているが、２０世紀初頭においても新たなヴァージョンで姿を見せているのであり、その中にはスリランカ出身のクマワスワミのようなヨーロッパ外部の存在による主張も含まれていた。社会的関心と芸術解釈との強い結びつき、ヨーロッパとその外部との関係性、そしてそれらの問題圏の重要な参照先としての西欧中世という問題群は絡み合いながら当時の知識人を捉えており、フォシヨンもその中に位置づけられることを確信した。彼における社会への社会学的関心と、社会主義へのシンパシー、民衆芸術やヨーロッパ外部への関心といった一見多彩な思考の領域を、統一的な視点からとらえる足場を得ることができたと考える。

今回、ある文献にあたるたびに当時の思考と学問の地平への見通しがさらに深まり、検討すべき文献は増えるばかりであった。その大半を収集することはできたが、それら全部を深く十分に検討する作業は未だ残されている。今後さらに探求をつづけ、フォシヨンの思考の背景と奥深さ、豊かさをいっそう具体的に明らかにしたいと考えている。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）
①<u>阿部成樹</u>「アンリ・フォシヨンと歴史の時間」『山形大学大学院社会文化システム研究科紀要』第 7 号、2010 年、53-60

〔図書〕（計１件）
①<u>阿部成樹</u>「変容の地平――アンリ・フォシヨンの思索から」タイトル未定（国際シンポジウム「時の作用と美学」報告書）、国立西洋美術館、2014 年刊行予定（掲載決定済み）

〔産業財産権〕
○出願状況（計　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
阿部　成樹（ABE SHIGEKI）
中央大学・文学部・教授
研究者番号：９０２７０８００

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）
研究者番号：